東京下町におけるローカル・アイデンティティの再構築

—新住民による新たな「地元」づくりとそのパラドックス—

一橋大学大学院　金善美（キムソンミ）

1 目的

かつてブルーカラーの集積地として独自の社会秩序や地域文化を培ってきた東京の下町エリアは今日、脱工業化やグローバリゼーションにともなう住民の多元化や格差拡大を経験しつつある。相対的に同質性の高いライフスタイルや階層に依拠して形作られてきた東京下町のローカル・アイデンティティは、地域社会を取り巻く変化の中、いかなる変容を遂げているのだろうか。このような問いに対して、本報告は 2000 年代以降、再開発や観光地化が活発に進む東京都墨田区の地域社会を対象に、近年この地域に転入してきたホワイトカラー層や自営業者層の新住民を中心とする地域イベントの取り組みに着目し、下町という都市空間を媒介したローカル・アイデンティティが今日、若年層の新住民たちによって新たに構築されていく過程からその答えを探る。

2 方法

2010 年 4 月から 2013 年 12 月までの間に開催された祭りや手作り市、音楽祭など、まちおこし・まちづくりに関連した複数の地域イベントで知り合った若年層の新住民や自営業者、町内会や商店街組合など既存の住民組織の関係者など十数人の人やグループを対象にした聞き取りのデータを用いる。なお、人口・産業に関する基礎的な統計データや行政資料なども活用する。

3 結果・結論

本事例は、地域にさほど興味を持たないホワイトカラー層の新住民—近隣社会の緊密な人的ネットワークの中で日常生活を送る旧住民の間の分断という、しばしば指摘される二者対立の構図に必ずしも当てはまらない今日の下町社会のリアリティを提示するものである。「よそ者」のまま留まることもできた新住民たちが新たな「地元」づくりの主体となった背景には、①若年層新住民の「つながり」「コミュニティ」への希求②ホワイトカラー化した下町 2・3 世の存在③オーセンティックな戦略に依拠した付加価値化をめざす自営業者層の働きかけという 3 つの要因であった。

これら新住民の手によって作り出される、自らの「地元」としての下町は、人のつながりが希薄な現代社会においても依然として維持される「人情共同体」のイメージを継承しつつも、それに創造性や革新、個性といった要素を付け加えることで、伝統と見慣れないサブカルチャーが共存し、大衆酒場と洗練されたカフェが軒を並べるような都市の磁場として想定される。旧来のローカル・アイデンティティがブルーカラー労働者や零細自営業者層からなるものづくりの世界を軸にしていたとすれば、新住民によって再構築されるローカル・アイデンティティは職種や階層よりは趣味やライフスタイルの類似性に大きく依拠している。このような試みは、外部からの再開発や観光地化の波にさらされるだけではなく、住民自らの手で何かしらの「下町らしさ」を選択し保全していく対抗運動の可能性を示すものである。しかし一方で、新住民は土地との必然的な結びつきを持たず極めて流動性の高い存在であり、また彼らが作り出す下町像は消費文化と強い親和性を持つため、ローカル・アイデンティティの再構築はつねに不安定でリスクをともなう過程となる。